

出発における課題——教師の戦争責任

一 敗戦の詔書と戦後教育改革 一九四五（昭二〇）年三月、アメリカ軍によるのち東京大空襲では約一〇万人が焼死した。六月アメリカ軍は沖縄に上陸し、沖縄県民の約五分の一にあたるおよそ二万人が犠牲になった。八月六日の広島原爆投下では約二〇万人が命を奪われ、九日の長崎原爆投下では死者は約七万人以上であった。

天皇の名によって遂行された戦争によって死亡した国民は、約二七

〇万人とも三〇〇万人満員ともいわれている。

一九四五（昭二〇）年八月一日に日本政府はポツダム宣言を受諾し、天皇は、一五日正午にラジオを通じて無条件降伏を布告した。

「時運ノ趨ク所耐ヘ難キヲ耐ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ：（中略）：国体ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ」という詔勅を読み上げた。国民は、これを敗戦の受諾と受け止めて、涙を流すとともに戦争終結に安堵したのであった。敗戦の決意を日本民衆の意志で選択せず、天皇に代表して貰ったところに戦後の日本人の自己（個人）「確立のひ弱さを生む原因がはらまれていた。

敗戦という時局の変転に対応するために、文部省はとりあえず戦時教育体制の解体に取り組み、一九四五年九月二〇日に文部次官通達「終戦に伴う教科用図書取扱方に関する件（戦意昂揚に関するもの等を削除し、文化国家の国民にふさわしい教養・国際平和等に関する教材等の補充）」、「学徒軍事教育並戦時体錬及学校防空関係諸訓令等の措置に関する件」を発し、一〇月一五日には、治安維持法を廃止した。

一〇月三〇日には、マッカーサーの教育四大指令の一つ「教員及教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件」が出され、戦時中の軍国主義・皇国民教育の推進者が追放されることになった。戦時中は「忠良ナル臣民」として戦時教育に励んだ教育者は、「忠良ナル臣民」であったが故に戦後は追放される憂き目にあわなければならなかった。教育者は「何に對して」忠良であるべきか、が問われたときであった。いつの世でも理想と信実を求めて生きる青少年は教師達の言動と身の処し方を注視していた。

二 教師の戦争責任

1 富山中学校のストライキ

富山市は、一九四五年八月二日午前零〇時半に米軍B29の空襲

を受けて、旧市街の98%が焼け野原となった。富山中学校では、教師一人が焼死し、生徒5名が犠牲となった。家屋を焼失した教員もいた。富山中学校は校舎の被災は免れたが、死傷者への対応や勤務員の住宅仮設などに追われていた。全国のおおかたの中等学校は、これに似た教育破局の状態を敗戦の日を迎えた。

富山中学校では、八月一五・一六の両日を休校とし、九月一日には二学期の始業式を行った。四日から食糧増産の学徒動員が始まり、校内においては軍事教練の廃止・軍隊銃器搬送・宿営部隊引き揚げ、進駐軍来校など戦争処理の作業が続けられた。戦争中に「九師団の活躍を話し、至誠尽忠の心を若い魂に注入していた校長は、戦後になると「民主主義」を説いていた。富山中学校では、時局便乗的な校長及び戦時中と変わらない強圧的な教授を続けていた教師達への反発がきっかけとなって、全校ストライキが起こった。によれば、『北日本新聞』(s20, 10・26)は、「富中生同盟休校、軍事教練、教員に反感か——県立富山中学校生徒一一九六名は二十五日朝を期して同盟休校に入った。同校が未だに生徒に対し軍事教練を実施していることや、一部教員に対する反感が爆発したものと見られる。」と報じている(1 『富中高百年史』 九七五頁)。この校長は、四七年四月の衆議院選挙において買収をしたとして拘引され、富山中学校を去らねばならなかった。なお一九四六年九月には私立上野高等女学校四年生がストライキを起しており、ストライキが各地に広がっていた。生徒達の教師不信と時代状況への不安な心理の表現であった。

## 2 弘前高等女学校生の作文

弘前高等女学校では、八・一五以後もしばらくは、農耕作業と疎開物件の復帰作業がおこなわれていた。一〇月一五日に新学期が始まり、全校生の平常授業が始まったのは一〇月二五日以降であった。この当時、一切の価値観が崩れた後の虚脱状態に陥っていた教師達の「立ち位置」は定まらず、外界の状況の変化と新しい動きを「息

をころして見ているという状態」(2 一一三頁)であった。この状況に生きていたある生徒は、次のような感想を残している。

現世に関する感想 四年梅組 川村和子

今まで私達の受けた教育に対し今日の事態はあまりにも激変して居る。学生生活は今まで軍国主義的教育に徹底的に染込まれてしまつてゐました。そして、敗戦の今日になって、真実として我々に教へられてゐたことは全部嘘であるといふのです。私達はこの言葉を信じたのですが、それに対しても、また新たな疑惑が浮かんで来ます。その原因は、あまりにも極端と極端の対立から来るのではないでせうか。今まで真実らしかったことが虚偽なら、今後の真実であるといふ言を疑ひたくなるのは当然なことでありませう。これを打破してくれるのは一体誰なのでせうか。私達はこの疑惑を疑惑のままにして、社会に出て一体なにをしようといふのでせう。

学校でも公民といふ時間が特別にもうけて居りますが、私達に何を教へて居るのかさっぱりわかりませ。言葉が政治のことに關するただ口でもぐもぐして私達に聞えませ。それで結局は何と云つて居るのか、又これこれといふことについてはつきりした言葉で云ひながら、おしまいになると、ぼやつとぼかしてしまつて、それに弁解を加へたりして居ます。これでは、むしろ公民の時間なんてない方がましです。先生の退室なさつた後、皆んなして今日何を云つたの、とお互ひに聞き合つても、まとまつた答は一つもありません。これでよいのでせうか。二一年二月一五日(2 創立百周年記念事業協賛会編『百年史』 二〇〇一(平成十三)年二月十五日 青森県立弘前中央高等学校発行 一一三頁)

## 混沌の渦中、創造への挑戦

一九四六(昭和二一)年の読書指導

一九四五年三月、戦時特別措置として、中学校は一年短縮となり、四年終了で卒業した。課程修了の保証は定かではなかった。

柳田知常(国語担当)は、一九四五年三月生徒を卒業させると同時に聖学院中学校を退職し疎開先の岐阜県立第一中学校に移った。

敗戦の翌年三月〜八月まで聖学院中学校の卒業生に対して、価値観の変化に戸惑い今後どのように生きていくか・進路の選択などに悩んでいる生徒を励ますために『曳馬野だより』を毎月一回発行し、小包郵便で自己の蔵書の貸し出しをおこなった。

『曳馬野だより』第一号(一九四六年四月一日発行)に次のように記している。

軍閥の跳梁によつ日本は戦争に負けたといふ。それならば、何故日本に於てそのやうに軍閥が跳梁し得たか。十二月八日の大詔及び真珠湾奇襲成功のニュースに歓喜したものは、悉く戦争責任者と言はねばならぬ。畢竟は国民全体、私たち自身の驚くべき無知が敗戦に導いたのである。その無智はどこから来たか。教育が普及しなかつたからではない。教育の方法が誤つてゐたのである。自分で、自分の頭を使つてものを考へるといふ訓練が足りなかつた。

その第二号では、T君の意見に同意できない旨を書き、N君の意見を紹介している。

西洋の「人間臭さ」を厭ふといふT君の気持ちちが解らぬわけではないが、東洋の「知恵」に向かふ前に、先ず西洋の意志の正体に踏み入つて、徹底的にそれを見極めることが急務だと思ふ。むしろ僕は次のN君の態度を良しとしたい。「僕は文学特に小説又は一般的な世間的な事については零だど気が付きます。それに対して現在かう考えてゐます。先づ一つの自分に關心ある

事から考へ出し、更にその持つ意味を正しく知るため各分野から研究しやうと思ひます。そこで、僕は歴史から始めようと思ひます。ただ部分的に説明するやうな歴史の勉強でなく、思想・

文化・政治・経済の各方面から

学ばうと思ひ、今、大類伸著「西洋史新講」から始めてゐます。なんだか少しずつ明るくなるやうな気もします。」(四月八日、高円寺 N・A)

第五号(昭和二十一年八月十日発行)では、恋愛を話題にして

○ 恋愛の渦の中で、人は水に溺れるやうになる。第三者は決して手を伸べてやる事が出来ない。人はめいめい自分の腕で必死に泳ぎ抜くぬく他はない。大多数の人が、そこで強かに水を呑む。その苦しさは恐らく人は終生忘れぬであらう。

○ 恋愛を扱つた文学で、真に私たちを動かす力を具へてゐるのは案外すくない。漱石の「それから」の代助と三千代、「彼岸過迄」の須永と千代子は、いつまでも私の記憶に残つてゐる。志賀直哉の「暗夜行路」(殊にその後篇)は、その倫理性の厳

しさが殆ど読者を戦かせる。滝井孝作の「無限抱擁」。武者小路実篤の「お目出度き人」その他。やや傾向はちがうが、堀辰雄の「菜穂子」その他。一葉の「たけくらべ」、泉鏡花の作品、久保田万太郎の作品には、恋愛の哀歎が残りなく描かれてゐて実に美しいが、謂はばそれは一種の風俗書の美しさであつて、人性の深みに於て切り結ぶところは少い。

西洋の作品については良くは知らぬけれど、私の読んだ範囲ではトルストイの「アンナ・カレニナ」が群を抜いて立派である。ロマン・ロランの諸作にも清純無比の恋愛が描かれてゐる。(『聖学院中学校高等学校百年史』 二〇〇七年三月 同校編集発行 二〇五〜二一五頁)

騒々しい時代において、卒業生(新制高校三年生相当)の悩みに

対して真率に向かい合ったきわめて質の高い読書指導がなされていた一例である。

1945年8月15日 敗戦

コラム 満州国での混乱 山崎正和(一九三四(昭和九)年、京都府生まれ)

昭和二十年八月十五日、当時小学校六年生の私は満州の奉天(現在の瀋陽)で第二次世界大戦の終わりを迎えました。……中略……

昭和二十一年、つまり、敗戦の翌年の四月、私は居留民団立瀋陽中学に進学します。(免許を持たない代用教員の先生が熱心に教えてくれた。)先生たちはいずれも素人なので、授業の進め方はそれぞれに破天荒です。たとえば、ある先生は、世界史を教えるという名目の下で、半日もかけてマルティン・ルターの伝記を話してくれました。

また、ある国語の先生からは、明治・大正・昭和にかけての文豪たちの文章を丸暗記するという訓練を受けました。そのときに出会った文学者では、なぜか「吉田玄二郎」という大正・昭和期の作家の名前が、記憶に残っています。(一三ページ)

ルターの伝記の授業にしてもそうだし、ドヴォルザークやラヴェルの西洋音楽にしても、なぜあれほど中学一年生の心に深く沁み入ったのか。逆説的になりますが、それはすべて遠い遠い世界から聞こえてくる文明の声であったからでしょう。遙か彼方には何か普遍的な文明の世界がある――。

……中略……

そして、同様にして、そのときには気づかなかったことですが、もつとも大切なことにもつながっていました。

満州で過ごす私たち中学生は、国語、すなわち日本語を学ぶことで、

明治維新によって誕生した近代日本の新しい日本語、つまり普遍性を持った標準語というものに、じつははじめて触れていたのです。(山崎正和『文明としての教育』二〇〇七年一月二〇日新潮新書 新潮社 一二―一五ページ)

西尾実の国語教育研究の発展過程

V 模索期 昭和二十一年(一九四六)一月―昭和二十三年(一九四八)一二月

VI 成熟期 昭和二十四年(一九四九)一月―昭和三十六年(一九六一)一二月

VII 集成型 昭和三十七年(一九六二)一月―昭和四十七年(一九七二)一二月

VIII 大成期 昭和四十八年(一九七三)一月―昭和五三年(一九七八)一二月

昭和二十五年の読書指導

紀田順一郎 中学三年

神奈川師範学校女子部の附属中学校 秋田鎮枝先生

このようなよそ行きの授業の内容は大方わすれてしまったが、いまでも折にふれて思い出す印象的な授業もあった。明治から昭和戦前までの作家名とその代表作品をリストアップし、それを大きな模造紙に清書させられたのである。明治班、大正班、昭和(戦前)班という三つのグループに分かれ、それぞれ夏目漱石なら『坊っちゃん』、芥川龍之介なら『羅生門』、有島武郎なら『一房の葡萄』という具合に、まずは中学生相応の書名を合計百点ぐらいリストアップした。教科書に掲載されている作品、貧弱な学級文

庫に入っている作品、そのほか参考書片手に聞きかじりの作品を適当に案配したもので、自分たちが満足に読んだものはない。無知ということはおそろしいもので、強引に一作家一冊にしばった結果を秋田先生に示すと、「そうね、このくらいかな」という不得要領の許可が出たので、大きな紙に墨書した。当時はまだマジックインキなどはなかった。

かくて二葉亭四迷から石川達三まで、三代の作家数十名の名作リストが完成すると、主事校長)に見せてこいといわれたのは、いささか意外だった。あとから考えると、この教育プランは四十年配の主事から出たものかもしれない。私の班のリストを一目見た主事が、「いや、どうもこれはね」と朱筆を入れながら苦笑いをした瞬間を、六十数年後のいまもはっきりと思い出すことができる。それは「島崎藤村」を「島崎島村」と誤記していたからで、犯人はほかならぬこの私なのであった。

ほどなく中学生編集委員による一大文学全集貼リストが、教室のうしろの壁に並べて張り出されたのだが、その効用たるや絶大なものがあった。自分たちが作ったものなので、休み時間などになんとなく眺めているうちに、島崎藤村は『破戒』、永井荷風は『すみだ川』、久米正雄は『破船』、志賀直哉は『暗夜行路』というようなことが、いやいやながらの暗記ではなく、自然に頭に入るようになったのである。(略)完成したリストを手に、各グループの

代表が一冊ずつの選考理由を公表した。

ともあれ、それ以降、書店で文庫本や全集の棚を見るたびに、「これがあのリストの本か」と、手に取ってみるきっかけが生まれたような気がする。いくら書物に飢えた時代とはいえ、若い世代がいきなり一定レベルの文学作品に関心を抱くには、それなりの手続きというか、過程が必要だ。もし、狭い経験や好悪から選ぶだけなら、子どもの世界は遅々として拡大しないであろう。私

が、最小限でよいから、読書の教育、指導が必要であると強調するのは、こうした経験からである。

紀田順一郎著『横浜少年物語——歲月と読書——』二〇〇九年  
二月 文藝春秋 229

○ 母校の沼津中学校は、瓦礫の山に変わってしまった。中略：極度の食糧難時代だから、皆たえず飢餓感を持っていたはずだが、戦後すぐの時代の中学生たちは、空きつ腹をかかえている割には好奇心旺盛に、よく動いたものである。

「鬼の詞」という妙な名前のガリ版刷り同人雑誌もそんな空気の中で生まれた。同人は私たちの若い教師だった茨木清氏、私を含む四沼津中学三年生だった。茨木清は、大阪生まれ。大学を出てすぐ沼津中学校の教師になった。兵卒として二年間を朝鮮で過ごした後、復員してふたたび沼津中学校の教師になった。(28P)

○ 墮落の唄 茨木 清(中学校の当直室に住んでいた。この部屋で、大学のゼミナールのような輪講をした。テキストは、リルケの『若き詩人への手紙』(訳本)であった。)

人の子と 生まれ落ちては 花に笑む 蝶の如くに 蝶  
の舞ふ 花の如くに 恥もなく 育ちてゆけと ちちのみの  
父のみことは 朝夕に 祈念しけむ ははそはの 母のみこ  
とは この世には いまさすあれど 草の葉の 蔭ゆわれを  
ば ねもごろに みそなはしつづ をちもせず 嘲笑はれも  
せず きららかに 世をば渡れと いつくしび たまはむも  
のを 人屑の ごとく言はれし 教師てふ 職につきゐて  
いつしかに 人をも避けつ うつそみの 世にも拗ねつつ  
ひねくれの 性とはなりぬ しかすがに四人五人 なつき来

る。教へ児のどち　うち集ひ　笑むさま見れば　おのづから  
心も清し　いまさらに　何か恥　ぢなむ　かくのごと　吾を  
さとしつつ　しろがねも　くがねも玉も　稼ぐべき　すべを  
知らずて　隙間もる　風さへ凍り　寝ねがてに　見る玻璃窓  
に　月一つ　鎌かと冴ゆる　あばらやの　部屋に起き臥し  
若草の　妻もあらねば　垢にじむ　きたなき衣　朝夕に　身  
にはまとひつ　腐れ甘藷　人蓼牛蒡　切り刻み　鍋にほり込  
み　飯炊ぐ　煤にも馴れて　いぶる木に　しはぶきしつつ  
ひそやかに　涙ぬぐへる　わが身とは　誰か知るらむ　墮落  
の　唄の一節　高らかに　胸にひびきて　ひとりする　笑ひ  
もむなし　日の本の　神は畏し　あなあはれ　飯か焦げけむ  
ナムアミダブツ

(大岡信『詩への架橋』　一九七七年六月　岩波書店

37 p)

○ 輪講のために選ばれたテキストは、リルケの『若さ詩人への手紙』の訳本だった。今、私の手もとにはそのガリ版もないし、本もないので、どれくらいのを量を読んだかわからないが、皆がガリ版刷りのテキストを持ち、順番にある長さずつを読んで、解釈してゆくのである。考えてみれば、何ともはや無謀なことだった。私たちは、リルケの文章に出てくる「経験」、「孤独」その他の語を、ほとんど語として理解できなかつたはずである。茨木氏自身、どれほどわかつていたか怪しいものである。にもかかわらず、私たちは（いや、少なくとも私は）魅せられたようになって、この難解な詩人の文章を読みくだこうと努力した。「鬼の詞」という雑誌を出したことが私にとって決定的な意味をもつにいたったのは、どうやらこの寺子屋式ゼミナールがあったか　だったように思われる。（大岡信『詩への架橋』　一九七七年六月　岩波書店　37 p)

コラム

街は静かになり、私達は食糧と燃料の事以外に神経を使うことは少なくなった。

ある日、食糧を求めに外にでた私に声をかけて走り寄る二人の女学生がいた。いきなり、

「先生、何か教えてください」

「え？」

「何でもいゝんです、勉強させて下さい」

「……」

「私、国語しか……」　「毎日国語でいゝんです。」

「教室がないわ」「中庭でだって……」

私は何か込み上げてくるものにつき上げられるように

「いゝわ、じゃ、とにかく家にいらっしやい」

と言つてしまった。

学校からはなれて二ヶ月余り、冬である。

「石炭もなしに、どうして零下三十度を切りぬけるか」が日本人

当面の悩みである今、彼女達は健気にも「勉強がしたい」という。

誰がこの願いを拒めよう。

辛うじて運び出し、廊下にならべた本の大部分は父の専門書であった。その中国文学の本をかき分けて、数少ない私の本を探するのは意外に大変であった。（略）塾は三日に一度であったが、度を重ねる毎に聞き伝えに数が増えて、十帖ほどの我が家は一ぱい

になる。

もう一つの部屋は既に地方から引き揚げて来た父の教え子夫婦が同居している。従って授業の日は父母は台所に立つことになる。時折気分転換に皆で歌う時、ふと途中で止めることがあると、台所で唱和する二人の下手なデュエットが聞こえて笑うこともあった。

(溝口節著『さようなら楡の街はるびん』一九九五年五月 太陽プリント社 一八九・一九〇頁)

#### 混沌渦中の模索

○満州 ハルビン高等第一一女学塾が発足するのは年明けてからであった。教室は工大鈴木が区長宅の二室と書斎を借用。(略)机は生徒の持ち寄るミカン箱。教科書なし。筆記用具は使い古しの裏紙を利用。小黒板一枚。

教師も生徒も次々に聞き伝えて集まって増加する。授業は二部、隔日、教師も生徒も一日学校、一日物売りである。室内では教師のモンペをなめんばかりに生徒が坐っている。ペランダも庭の木かげも教室になる。教師達の唯一の参考書は学長書斎の百科事典、国語も数学も理科もこれで調べる。

庭で「早春賦」を歌ったクラスは次の時間教室で国語「早春賦」の鑑賞をやる。ライラックの咲くペランダではヴェルレーヌの「落葉」を暗唱する。

しかしその時教師も生徒もわずかに飢えや恐怖から解放されるようであった。

「内地の女学生は敗戦と共に勉強しているにちがいない」  
「何ももって帰ることはできないだろうけれど頭の中に入っているものは没収されはしないのだから」  
と皆一生懸命に学んだ。

更にそういう学習の中で一学期の終りには、脚本を書き、取られ

残りの布切れを持ち込んで衣裳を工夫しての劇の上演までやってのける。期せずしてこの劇の上演は事実上塾のお別れ会の出し物となった。

(溝口節著『さようなら楡の街はるびん』一九九五年五月 太陽プリント社 一九三頁)

\*溝口節 福岡県前原市に生まれる。一九四三年日本女子大学国文学部卒業、哈爾濱富士高等女学校教諭となる。一九四六年敗戦引き上げにより自然退職となる。

#### 戦後民主主義の形成と国語教育

1948年・学制改革により「東京都立第一女子新制高等学校」と改称

1950年・「東京都立白鷗高等学校」と改称、男女共学となる

1967年・学校群制度導入、旧第五学区内で上野高校とS群を組む

1982年・グループ選抜制度導入、Sグループに編成される

1992年(平成4年)・コース制導入。全都学区の単独選抜校となる

1998年・定時制課程が閉課程

2005年・2005年度入学生よりコース制を廃止、普通科に。都立高としては初めて附属中学校が併設される

一 笠文七におけるの国民科国語と戦後新教育の受容と実践——  
国語教育史覚え書き55

1、笠文七は、一九三八(昭和13)年9月1日、福岡県糸島郡波多江尋常高等小学校の教師となる。以後、定年までの38年間、福岡県下で小学校・中学校の教師・指導主事・校長を勤める。

2、ここでは、笠文七における国民科国語時代の軍国主義教育と戦後新教育時代の民主主義教育の受容と実践の実際を追跡し、当時の意欲的な国語科教師がたどった国語教育思想と実践の軌跡を捉える。

○ 母校の沼津中学校は、瓦礫の山に変わってしまっていた。：中略：極度の食糧難時代だから、皆たえず飢餓感を持っていたはずだが、戦後すぐの時代の中学生たちは、空きつ腹をかかえている割には好奇心旺盛に、よく動いたものである。

「鬼の詞」という妙な名前のガリ版刷り同人雑誌もそんな空気の中で生まれた。同人は私たちの若い教師だった茨木清氏、私を含む四沼津中学三年生だった。茨木清は、大阪生まれ。大学を出てすぐ沼津中学校の教師になった。兵卒として二年間を朝鮮で過ごした後、復員してふたたび沼津中学校の教師になった。（大岡信『詩への架橋』一九七七年六月 岩波書店 p.24・25）28P）

○ 墮落の唄 茨木 清（中学校の当直室に住んでいた。この部屋で、大学のゼミナールのような輪講をした。テキストは、リルケの『若き詩人への手紙』（訳本）であった。）

人の子と 生まれ落ちては 花に笑む 蝶の如くに 蝶  
の舞ふ 花の如くに 恥もなく 育ちてゆけと ちちのみの  
父のみことは 朝夕に 祈念しけむ ははそはの 母のみこ  
とは この世には いまさすあれど 草の葉の 蔭ゆわれを  
ば ねもごろに みそなはしつ つ をちもせず 嘲笑はれも  
せず きららかに 世をば渡れと いくくしび たまはむも  
のを 人屑の ごとく言はれし 教師てふ 職につきゐて

37p)

いつしかに 人をも避けつ うつそみの 世にも拗ねつつ  
ひねくれの 性とはなりぬ しかすがに四人五人 なつき来  
る 教へ児のどち うち集ひ 笑むさま見れば おのづから  
心も清し いまさらに 何か恥 ちなむ かくのごと 吾を  
さとしつ つ しろがねも くがねも玉も 稼ぐべき すべて  
知らずで 隙間もる 風さへ凍り 寝ねがてに 見る玻璃窓  
に 月一つ 鎌かと冴ゆる あばらやの 部屋に起き臥し  
若草の 妻もあらねば 垢にじむ きたなき衣 朝夕に 身  
にはまとひつ 腐れ甘藷 人蓼牛蒡 切り刻み 鍋にほり込  
み 飯炊ぐ 煤にも馴れて いぶる木に しはぶきしつ つ  
ひそやかに 涙ぬぐへる わが身とは 誰か知るらむ 墮落  
の 唄の一節 高らかに 胸に ひびきて ひとりする 笑ひ  
もむなし 日の本の 神は畏し あなあはれ 飯か焦げけむ  
ナムアマダブツ  
（大岡信『詩への架橋』一九七七年六月 岩波書店

○ 輪講のために選ばれたテキストは、リルケの『若き詩人への手紙』の訳本だった。今、私の手もとにはそのガリ版もないし、本もないので、どれくらいの量を読んだかわからないが、皆がガリ版刷りのテキストを持ち、順番にある長さずつを読んで、解釈してゆくのである。考えてみれば、何ともはや無謀なことだった。私たちは、リルケの文章に出てくる「経験」、「孤独」その他の語を、ほとんど語として理解できなかったはずである。茨木氏自身、どれほどわかっていたか怪しいものである。にもかかわらず、私たちは（いや、少なくとも私は）魅せられたようになって、この難解な詩人の文章を読みくどうと努力した。「鬼の詞」という雑誌を出したことが私にとって決定的な意味をもつにいたったのは、どうやらこの寺子屋式ゼミナ-



ルがあつたか だったように思われる。(大岡信『詩への架橋』一九七七年六月 岩波書店 37p)

西尾實 国語教育学の生成過程——言語生活教育の模索と展開

このように見れば、西尾実先生の国語科教育実践歴・国文学教授歴は、明治四三年(一九一〇)以来、実に六〇有余年にわたっていることがわかる。

いま、西尾理論の成立と発展の全過程を、いくつかの期間に区分するとすれば、次のようになる。

- I 準備期 明治四三年(一九一〇)四月～大正 七年(一九一八)八月
- II 集積期 人正 七年(一九一八)九月～大正一四年(一九二五)一二月
- III 成立期 大正一四年(一九二五)一二月～昭和八年(一九三三)五月
- IV 発展期 昭和 八年(一九三三)九月～昭和二〇年(一九四五)八月
- V 模索期 昭和二一年(一九四六)一月～昭和二三年(一九四八)一二月
- VI 成熟期 昭和二四年(一九四九)一月～昭和三六年(一九六一)一二月
- VII 集成期 昭和三七年(一九六二)一月～昭和四七年(一九七二)一二月
- VIII 大成期 昭和四八年(一九七三)一月～昭和五三年(一九七八)一二月

各校で使用した教科書

神戸市長田高校 昭和四十三年度卒(遠藤涼子)

現代国語 I・II・III 三省堂

古典 乙〇

乙〇 武田祐吉・久松潜一・吉田精一 監修

古文解説 田中重太郎

漢文 貝塚茂樹監修

1 綴り方 山びこ学校 無着成恭

2 学校作文

私立愛国学園(東京都江戸川区)では、初代理事長(織田小三郎)の提唱により、一九五五(昭和三〇)年十二月から全校一斉に作文指導に取り組む。

全校生徒に毎月必ず一篇ずつ、中学部の生徒には五枚以上、高等部の生徒には七枚以上の作文を、主として家庭作業で書かせ、その中で多少優れた作品は学校放送で全校に放送しています。また優れた作品を毎月五篇選び、愛国新聞に掲載し、生徒のはげみにすると共に、作文の練習教材としている。(愛国学園編・発行『愛国学園創立七〇周年記念誌』二〇一二(平成二四)年十一月 二二七頁)

…中略…昭和三十七年からは、前年の一年間に愛国新聞に掲載された生徒の作文を、作文教育に造詣の深い複数の先生方の批評を添えて「愛国学園作文集」として、毎年度末に編集し、生徒の副読本として活用しています。

その後、昭和五十年に、作文を書かせる回数には毎月を改め、年に三回とする等の時代に適合するための若干の修正が行われ

てはいるものの、作文教育の理念や実践の枠組みは、そのまま継承されている。(同前 二二八頁)

今日、中・高校生」殷の作文力の低ドが問題視され、その強化の方策が模索

されていることを考えるとき、創立者が前々からその必要性を説き、いち

早くそれを実践された識見と熱意は高く評価されるべきでありましよう。

#### 愛国学園の「作文教育の理念」

ア 国語教育の最終目標は作文教育にある。

イ 作文教育の心構え四か条

① 作文は練習によつて上達し、上達すると好きになる。

② 中・高校生の作文は、短文だけでは、ほんとうの力はつかない。

③ 中・高校生の作文は、生活文に始まり、生活文に終る。(童話・小説・詩などの創作は提出させない。)

④ 作文は、一部の作文好きの生徒のための英才教育であつてはならない。

ウ 国語科一教科の枠内でおこなうのではなく、校内のあらゆる教育活動を通じてそれぞれの教師が機会ありごとにおこなう。

○ 自己評価の観点は表記面と内容面に分けて与えている。内容面は、次の四点である。

① 一つのテーマで書いているか。

② 自分の言いたいことがはっきりしているか。

③ 感受性豊かに表現されているか。

④ 様子が目に浮かぶよう表現されているか。(同前書 二二八

二三四P)

愛国学園高等学校編・発行『愛国学園作文集第一号』に次の作文とその批評が掲載されている。

自殺 高等部二年 永田尚子

父に論旨の通らない文句を云われ、口応えも出来ず黙つて聞いていた。皮肉たつぷりの叱元がとりわけ身に沁みた。時計の針は十一時を廻っているので床仁に着く。しかし、とめどもなく出てくる涙がどうしようもなかったが、いつの間にか眠りに入った。

翌日は目ががはればつたかった。ぶすつとした顔で、それでもカバンを上げて家を出た。姉が心配そうに見送っているのに振り返りもせず足を速めた。

学校に着いても一日中不機嫌であった。授業が終つて校門を出た時、友達はいつもおしゃべりな私が黙っているので不審に思つたらしい。

「永田さんどうしたの？」と聞いてくれた。云おうかな？と思つたが、云えなかった。

「何でもたいわ」笑顔を作るつもりだったのが苦笑いになつてしまつた。

青戸から一人になると、怒りと悲しみがこみ上げてきた。「閑屋、閑屋」という声に気がついて駅の階段を降りたが、家には帰りたくなかつた。

踏切りを渡らず広い寂しい大通りをテクテクと歩き始めた。歩道には線路に沿うて雑草が茫々と生えている。それを見て「ああ、あの人とこの道を歩いたっけな」と思い出しつつ歩いていった。

いつの間にか、七時をすぎている。あの日の事も、今は寂しいものになって、父に対する憎悪が燃燃え上がってきた。

「父は私を憎んでいる。私は駄目な人間なんだわ。不真面目でろくでなし。私なんていない方が家のためにもいいんだ」そう思つて線路を見た。

電車がガーツ、ガーツ、と通り過ぎて行く。車輪を見ていると、レールに引き込まれそうに体が前にのめる。

「私も、この車に章江引かれて死んでしまおうか、いやまだ人生の半分も来ていないのだから死んだらつまらない」小さな戦いが心の中に生じた。

どうしたらいいだろう。ブーツと自動車の音がして、ライトが遠慮なく私を照らす。車は過ぎた。

人の気も知らないで、楽しそうに語らいながら散歩しているアベアベックを見ると強い孤独感に陥つた。止めどもなく大粒の涙が、冷たくなつた鼻筋を通つておちる。ぞくぞくと寒くなって尿意を催した。

靴も真白で、髪も制服も乱れている自分のはっきりわかる。自分が惨めになつた。

その時一人の男の人が、傍に近づいてきた。

「何処か具合でも悪いのですか？」今は何も恐れず、勿論警戒もしなかつた。

「いいえ」と答えた声が、胸にじんときた。その人は何か言葉を残して去つて行つた。

私はうらめしそうな顔で、その人を見送つた。ちゃんとした背広を着た男の人である。

九時を回つた。もう足が棒になつてきた。いざ！と思うと、なかなか飛び込めない。

線路は夜路をまつすぐに暗闇の中に進んでいる。それに沿う

て夢遊病者めいた足取りで暗い夜道をあてもなく歩き始めた。考えて考えて頭が割れそうになつてくる。誰か私の後ろからくるのに気がついた。右に曲がり、左に曲がると左に折れる。どこまでも私についてくる。

嫌だなあと思つていると、突然その影が私の前に立ち寒がつた。二十四、五歳、背広にネクタイの男の人である。

無造作にその人は私の肩をおさえた。

「どうしたんですか？」

「何でもありません」

「君、学校の帰りでしょう。もう九時半ですよ。早く帰らなかつちや」

「ええ帰ります」

「じゃ気をつけてね」この青年は私の歩いている道とは反対の方向に去つた。私には振り返る勇氣すらなくなつていた。

一時間位歩いたか、出来たばかりの新しい橋の手すりにもたれて水の流れを見ていると、渦が怪しく月の光に照らされて私を手招きしている。

「ああ！ここに飛び込んでしまおうかしら？私かもし死んでしまつたら泣いてくれる人はいるであろうか？Nさん。Sさん。いや泣いてくれまい。誰一人だつて、誰一人だつて……。」そう思うと、涙がポタリ、ポタリと乾ききつた橋の面に落ちた。ふと後ろから声が出た。振り向くとさっきの青年である。

「まだ帰らなかつたの？」

手に自転車のハンドルをつかんでい。

「自転車どうしたんですか？」

「君がとても・配だから家に帰って乗って来だんです」

あまり、親切すぎて何か云い知れぬ恐怖感が湧いてきた。

この人を信用していいのだろうか？しかし、今となつてはすべてを諦めて、「どうなつても……」という大胆な気持が私を

柔げた。

「送っていくから帰ろうよ。君の家は何処」

「関屋です」というと、相手は驚いてしまった。ここは墨田区吾嬬

町だというのである。

「も少し歩いたら帰ります」

私は腹立たしそうに云った。

「じゃ十一時迄に帰ろうね」

そう云って私と並んで歩きはじめた。しっこくて嫌な人だと思っているうち、いろいろ楽しい話や、つらい話をしかけてきた。この人は家が貧しいため中学を卒業してすぐ工員になったそうである。

もう十一時を過ぎていた。

私は彼の後から自転車に乗った。風がビュービュー吹いて寒さが身に沁みる。

だんだん家の近所に近づいて来た。恐怖感が胸々しめつける。家に着いた。店は開いており、家内は騒がしい。

「今晚は！」大声で彼が呼ぶと、まっさきに姉が落ちつかぬ顔をして出てきて、

「尚子ちゃん！どこへ行っていたの早く中に入りなさい」

その次に、病身の母が重たい足どりで出てきた。

姉が兄と父を呼びに行った。入れ違いに兄がバイクで帰ってきた。

「尚子帰ってきたか」外から大声でどなった。

そして障子を開けるなり私の首をつかみ、

「バカだなお前は！」

その声は泣き声に変っていた。父も母も兄も姉もみんな私の傍にきて声をあげて泣いた。

この作文についての外部の評者（東京都教育庁・実方亀寿）は次のように批評している。

私ははじめに、この文は永田さんの創作かと思いましたが、創作だとしたら、いくらか気が楽になり、作者の意図が、どこにあるのだろうなどと考えられますが、もしも、これが創作でなく、永田さん自身のことだとしたら、ゾツといたします。しかし、ここでは創作であろうと、事実だろうと区別することなしに、私の感想を書いてみましょう。

一人の少女が自殺しようとした事実は書かれているが、この文をよんで、その原因も、心の細かい動きも書かれていないと思つた。

しかし、書き出したら終わりまで、この深刻な問題が、すらすらと書かれているので、細やかさや、深刻さが出ていないのだろうか。

「どこか具合でも悪いのですか」という男の人のことばに「今は何も恐れず、勿論警戒もしなかつた。」「今となつてはすべてを諦めて」という大胆な気持が私を柔げた。」のようなことばは永田さんの実際の行動を描写したというよりも、創作のように思われます。しかも、こうした立場の少女の心の動きを、じゅうぶんにえがききれない筆づかいのように思われました。いずれにしても、数少ない題材であるだけにびっくりいたしました。

…中略…

この文の終末で人間は孤独ではないのだという結論を作者ははっきり示していることによつて、みんなが救われる思いがいたしました。

（愛国高等学校編集『雲と土 愛国学園作文集 1』一九六二（昭和三七）年三月 愛国学園出版部 四〇～四三頁）

浜本解説厳しいテーマの作文である。この作文は、部分的には虚

構があると推定されるが、そのことによつて「死へ誘い込まれる心情」の表現には真実味がまし、成長中の世代の「挫折」とそれを克服していくいきさつがリアルに感じられる表現になっている。このような「負」の経験を書いた作文を、全校生徒に公開する「文集」に選んで採録した指導の教師たちの生徒への強い「信頼感」に感心した。人間の「負」の面にも正対させようとする迫力がある。

「(ありのままを書く) ことによつて認識を確かにする」という時代の作文教育思想が地盤を支えている。

## コラム

### 吉祥名画シアター上映作品

一九八六(昭和六一)年、年頭の職員会議で清水(八郎)校長から「この頃の生徒たちはよく勉強する反面、みずみずしい感性に欠ける傾向にあるのではないか。生徒の感性を掘り起こして、人間的な豊かさを育てたい」という話があり、その具体的な方策の一つとして『吉祥名画シアター』が発足し、毎回「吉祥ホール」で上映されている。ここには、一九八六年度と一九八七年度の上映作品を掲げる。

四月十二日(土)	風と共に去りぬ
五月十七日(土)	ロミオとジュリエット
六月二日(土)	アマデウス
九月十三日(土)	テス
十一月二日(金)	ローマの休日
十二月十五日(月)	悪魔が夜来る
一月十七日(土)	シェーン
二月十四日(土)	誰がために鐘は鳴る

三月十一日(水)

田園交響楽

一九八九年度

四月十五日(土)

ローマの休日

六月十七日(土)

十戒

七月十一日(火)

雨に唄えば

九月十六日(土)

制服の処女

十月十三日(金)

自転車泥棒

十一月十八日(土)

愛と青春の旅立ち

十二月十二日(火)

戦場のメリークリスマス

一月十三日(土)

幸福の黄色いハンカチ

(守屋教育学園『吉祥五十五年の歩み』一九九三年十月 吉祥女子中学・高等学校 二八一頁)

## 2 文学教育

### 3 読書指導

### 4 作文指導

#### 作文例

和の心 愛国学園高等部三年 白石 菜月

花筏(はないかだ) 南風(はえ) 玉響(たまゆら) そして掌(だなごころ)。今挙げた言葉を理解し上手く使いこなせるといふ人は、一体どれほどいるだろうか。それ以前にこれらの言葉を知っている人がどれくらいいるだろうか。かく言う私自身、ある本を読むまでは聞いたことも見たこともない言葉だった。しかし、これらの言葉は間違いなく古くからあり、今なお伝わ

っているものだ。

それならば、どうして今を生きる私達がこれらの言葉を知らずにいるのだろうか。理由を考えてみた。第一の理由として英語などの外国語加入してくるうちに、だんだんと使われなくなった言葉があることが挙げられる。

また言葉によつては英語の方が浸透しているというものもある。第二の理由として暦や気候の問題もある。そして第三の理由は日本人の言葉の乱れによるものだ。

第一の理由に挙げられた英語の影響は計り知れない。今、英語を使わずに生活しなさいと言われても、多くの言葉が日常生活に入り込んでいたのでそれはとても難しいことだと思う。和製英語も数多くある。そういつたことを考えると、やはり英語の影響は大きい。

第二に挙げた暦の問題。これには地球温暖化の問題も多少関係する。近年は一年を通しての温度差がなくなってきた。昔の人々は草木の様子を暦がわりにしていたところもあり、季節というもののはつきりしていた。しかし、今では暖冬で雪が降らなかつたり、猛暑による熱中症で人が亡くなつたりするなど、以前とは少しづつ様子が変わり季節感が失われてきたことも言葉に影響しているように思う。また、陽暦と陰暦とに多少ずれがあることも季節感と言葉に関係していると感ずる。

第三の理由として言葉の乱れ。現代の日本では本来そこに使われるべきではない言葉を当たり前のように使うようになってきている。「全然」という言葉がその一例だ。「全然」とは否定の「〜ではない」と呼応する言葉である。しかし、今では「全然いいよ」や「全然大丈夫だよ。」など、本来の使い方とは違った使い方がされている。他にもこのような言葉はある。専門家も指摘するように言葉の乱れにより、いくつかの言葉は間違

った使い方がされるようになった。また、言葉そのものの存在を忘れられ使われなくなった言葉もある。こうしたことを考えているうちに、日本にはまだ多くの言葉が埋もれているのだらうと思うようになった。私はそのような言葉を一つでも多く知りたい。せつかくこの日本という国に生まれたのだから。日本古来の言葉への興味は尽きない。

そして、和の言葉と合せて忘れずにいたいと思うのは、和の心である。これは茶道や華道などを極めるといいうわけではなく、普段の生活の中で一つでもいいから日本人らしく行動するのだ。例えば毎日一度は緑茶を飲む。ささいなことであるが、ささいなことであるからこそ大切にしたいと思う。春には桜を楽しみ、夏には浴衣で夏祭り、秋には心静かに月見をし、冬はみんな鍋を囲む。こんな過ごし方はどうだろうか。私はどれも和の心に通じる日常だと思う。

一日一日の積み重ねが一週間となり一ヶ月となり一年となる。そうして人は年をとっていく。ならば、その一日一日を更に充実させ、自分らしくあるために、日本で生まれ生活していることを誇れるようなそんな生き方を私はしたい。そして、「楽しかった」と笑って人生を終えられるように。

私は日本という国に生まれてとても幸せだ。なぜなら命の危機を感じることもなく、温かな環境の中でここまで成長することができたからだ。世界では多くの国々がいまだ解決しない問題を抱えて武力衝突を繰り返している。そういう国々がある中で落ち着いて生活することができ、食事ができ、そして勉強できる環境にある、それはこの上なくぜいたくなことではないだろうか。世の中は生きたいと願っても生きることができない人、食べたくても食べる物がいない人、勉強したくても勉強できる環境にない人が大勢いる。私はその全てが足りている。人は本当に様々だ。時にそれが悲しいと思うこともある。人は一人では

生きていかれないとよく耳にするが、それはきつと本当のことだ。ずっと一人きりでいるのは辛い。人は弱いから一人で生きていくことはできない。だからこそ、人は集い人の和を大切にしようとする。和の心とは日本の心だ。古くは「十七条の憲法」の中で

も「和を以て貴しと為し」と書いてあった。これは心を静め己を制しそして人と争うなということだと思ふ。現代にも通じるものかおる。「和」という字には「和む」と書いて「なごむ」という読み方がある。なごむとは場がほのぼのとした気分になること、心が穏やかになることだ。現在のストレス社会において日々和みを求めている人も多いだろう。そんなときは静かに和に立ち戻って、みてはどうだろう。きつと安らぎを手に入れることができるはずだ。

和と心はどこかでつながっている。和は不思議と心を落ちつかせる。こういう時やはり自分は日本人なのだと感じる。そして日本に生まれて良かったと改めて思うのだ。和と和が結びついて輪となりその中で私は生きている。私にはまだまだ学ばべきことも知るべきことも多い。今の私が知っていることなどほんのわずかなことだろう。だが、今はそれでいい。これから学ぶことはきつと私を大きく変えてくれるはずだ。今年は高校の最上級生である。和の心そして和の言葉、その両方を大切に成長していきたいと思っている。

○九から一一一頁)

(一)

「和の心」について

倉澤栄吉 評

日本精神——「和」は、我が国の文化の中核であり、根幹である。古来、多くの学者や評論家が、このことを問題にしていた。和の心は日本精神を示す。だから、高校生の誰もが、ひと通り、これに触れて考えて見なければならぬ。この作文が、

その意味で、典型的な論文の一つと言える。

白石さんの白石さんらしいところは、この文章の書き出しと最後の段落にある。

書き出しの部分には、「花筏」「南風」「玉響」を例にして、問題提示をしている。そこが良い。これを受ける段階として、第二段階がある。この段階が、この文章の中心になっている。そこが問題提起の段階として主要な部分である。

そして、この段落を受けた第三、第四、第五の段落が、前提としてあり、

その次の「こうしたことを考えているうちに……」の段落から本論が始まるわけだ。それから先は、「和」という日本の精神の典型への言及である。こう見れば文章構成として、よくまとまった作品と考えられる。

もともとこの作文の内容は、学者や評論家が話題にしていた問題で、白石さんが成人になってからまとめ上げるべきもので、今回ののは、その入門的・試作的文章である。にもかかわらず、よくまとまっていて、「序説」として優れていると評価できる文章である。

(愛国学園出版部編『大地のめぐみ』 愛国学園 二〇〇九(平成二一年三月 二二〇頁)

九月二十八日、本校紛争の発火点となった、いわゆる「砂場集会」が校庭南面の砂場脇で行われる。発起人は三年生有志の四名。午前十時から十二時〇五分に亘る自由参加の討論会であった。参加者は三年生を中心とした約五十名で、教師若干名が立ち合った。

発起人の提起した問題はほぼ次のようなものである。

- 一、校内におけるビラ・掲示物の許可制について。
- 二、家庭クラブへの強制加入の問題について。
- 三、白鷗祭の準備過程と当日における教師の指導介入について。

四、白鷗祭における模擬店の運営について。

五、授業内容のつまらなさについて。

六、図書館における購入図書選定のいきさつについて。

(東京都立白鷗高等学校『百年史』一九八九(平成元)年三月 東京都立白鷗高等学校 一五六頁)

\* 第五項目めに「授業内容のつまらなさについて。」が掲げられていた。

紛争の全過程を通して、本校のとった方針は、生徒の提起した問題は教育全体に対する問題として、誠実に受けとめ、聞くべきは聞き、改むべきは改めるが、学校としての基本線は堅持して、全教職員が一体となって、父母と密接に連絡を保ちつつ、ねばり強く指導に当たっていくというものであり、学校として基本線とは、

(一) 如何なる事態においても、正常な授業の維持につとめること。

(二) 生徒側の正式機関として、生徒会を尊重し、問題はすべてこのルートに乗せて提起させ、討議し、解決していくということであった。既述のように一部生徒の提出した公開質問状にも、直接答えず、全校生徒に問題を提出させ、全校的な視野において問題の発掘と解決に当たったのも其の理由によるものであった。

(東京都立白鷗高等学校『百年史』一九八九(平成元)三月 東京都立白鷗高等学校 一六二頁)

東京大学附属駒場高等学校 卒業生のその後

高等学校の同窓会の通知が来た。わたしは同窓会になど出たくもないし、興味もない。すると160人の同 級生の近況を知らせるメールが送られてきた。160人といっても、自殺と病死を除くと150人くらいだ。ほとんどの者が近況報告の欄に、定年退職したことしか書いていない。そのうちの28人が野球チームを二つ作り、週に一回、球場を借りて試合をしている。暇だから週に二回でもいいという声もあったらしい。あとは孫の相手と趣味の園芸。働いている者はもうわずかしかない。何人かの開業医と日本共産党の国会議員。共産党と訣別したい経済学者。それにわたしくらいのものだ。

わたしの通っていた高校は、8割までが墓阜大学に進学するといふ受験校だった。思い出しだけでゾツとする。わたしは 一日かぎりのバリエード闘争に関わったおかげで、直線コースから脱落した。けれども他の連中は誰も眼の色を変えて受験戦争を生き抜き、現役で東大に入った。バリエードの連中も例外ではない。彼らは何を人生に期待していたのか。何をしたかったのか。年金をもらって週に一度、野球をすることが人生の目的だったのか。わたしにはわからない。どうでもいい気がする。

(四方田犬彦「犬が王様を見て、何が悪い」55頁 『週刊金曜日』1179号 018.04.08 金曜日 42頁)